

# レンズを通して

連載「二月」

写真・文 高円宮妃久子殿下



シマエナガ 13.5cm エナガ科  
種としてのエナガは分布が広く、ヨーロッパからユーラシア大陸の中部、中国北部、カムチャツカ半島のほか、沖縄を除く日本全土に生息。亜種も多く、世界で19亜種が知られている。東西南北系の4グループに分けた場合、北方系の亜種のみ顔が白い。



# 雪の妖精

写真文 高円宮妃久子

ここ数年、「可愛い」と大人気のシマエナガ。鳥好きのみならず、一般の方の間でも話題になっています。より可愛い写真を、と時間をかけているうちにタイミングを逸してしまっそうなので、今回、思い切って、シマエナガの写真を紹介させていただきます。

私が最初にシマエナガと出会ったのは北海道弟子屈町。平成30年2月1日の事です。気合を入れて撮影している間は大丈夫でしたが、じつと立って鳥を待っていると寒さが身に沁みました。また気温がマイナスの所に、油圧式の雲台つけた三脚を持参するという失態を冒したことも忘れられません。油が固まってしまったためにレンズを左右に振ることができず、鳥が移動するたびに「ヨイショ」と三脚ごと動かすことになりました。その後、北海道には数回まいりましたが、冬場は違う三脚を持参しています。

余談ですが、写真家の嶋田忠さんが経営されている「ザ・バードウォッチングカフェ千歳」に寄せていただいた際、バードフィーディングに使う脂身について貴重なお話を伺いました。お庭に餌台を設置していらっしゃる方のためにシエアさせていただきます。豚や牛の脂身は一度手につくと石鹼とお湯でゴシゴシ洗わないと取れません。それが鳥につき、羽毛がベタつくと断熱効果が薄れ、健康を脅かしかねません。木枠を作り、内部に金網を張って脂身を入れれば、鳥は木枠に止まるので、体への脂付着を最小限に抑えられるとのこと。

エナガの名前は長い尾羽が、ひしゃくの柄のように見えるため。枝の先端で昆虫、蜘蛛などを捕食。クスギやカエデなどの樹液を飲む。樹液のつららがあると、ホバリングしながら滴る甘い液を飲むことも。冬は餌も少なく、大事な栄養源。



今まで考えたこともありませんでした。

なお、バードフィーディングに関しては、生態系への影響を指摘する意見もあります。餌の少ない冬場に限定し、新鮮で鳥にとって良い餌を置く、餌台を清潔に保つなど、適切な手順を踏むことが大事と思われます。

閑話休題。シマエナガは顔が白く、正面を向くと丸くてモフモフした雪だるまのような形をしています。簡単にイラストが描けてしまうフォルムに、黒い目、おしゃべりなピンクの脛、そして小さな三角の黒い嘴。親しみやすさと愛らしい仕草が人々を虜にするのでしよう。私も首を傾げてこちらを見る様子には思わず笑顔になります。

恒温動物においては、同じ種であれば寒冷な地域に生息するものほど体重が大きくなるといえます。極寒の地においては体が大きいほうが有利なのでしょう。冬の厳しい北海道でわずかに体重8グラムこの鳥が暮らしていることが奇跡的に感じられ、その輝く姿が、本当に「雪の妖精」に見えます。



亜種とは、同じ種に属しながら、体の色や大きさ、模様の違いが明確なものである。本州に生息する亜種エナガ、キウシュウエナガ（九州や四国）、チヨウセンエナガ（対馬など）の3亜種は、いずれも黒く太い眉斑がある。

エナガの世界分布を見ると、顔の白いエナガが分布域の大半を占めており、周辺に顔の濃いタイプが生息。どのように進化してきたのか、興味深い。東京や千葉などでたびたび眉斑の薄いタイプを見るが、その位置づけはまだわかっていない。



まだ寒い2月、ころからヘアで繁殖準備に入る。蜘蛛の糸や蛾のまゆの糸を接着剤に使ってコケを張り付けた楕円形の巣を作る。遠くから見ると木のコブ。巣の内部には、たくさん鳥の羽が敷き詰められ、ふかふか。小指の先ほどの小さな卵を10〜12個産む。